

“The Blue Hotel”

—孤立と責任について—

橋 本 知代子

I

この “The Blue Hotel” (1898) をあえて一つの組織と見るならば、まず初めに Fort Romper の Palace Hotel の経営者 Scully, 息子の Johnnie そして三人の客で構成されている社会である。

この Hotel は色は淡青色に塗られ、その淡青色は非常に目立つものであり、どの旅行者もそれを見ないですますわけには、いかないほどであった。当時の東部特有の赤褐色や暗緑色系の色になじんでいる連中は、Nebraska の大草原にポツンと立っているこの Hotel の光景に圧倒され、哀れみや一種の恐れを抱いたのである。この Hotel の光景の描写は、Scully の腕前の発揮と、三人の客の一人である the Swede の「恐れ」を象徴している。

Scully は毎朝毎晩、Romper にとまる鈍行列車を出迎えに行き、旅行者を勧誘するのを習慣としていた。ある日、彼は三人の客をつかまえたのである。一人は目つきが鋭く恐怖におびえている the Swede, もう一人は the Dakota line との境に近い農場へ行く途中である、背の高い日焼けした the cowboy, そして最後の一人は小柄で無口な the Easterner であった。Scully が、この三人の客を引き連れて入ってきた Hotel の中には、中央に巨大な stove が置かれ、火は不気味なほどゴーゴーと燃え上がり、後に起こる悲劇の予想を象徴している。その stove のそばで Scully の息子 Johnnie と老農夫が、High-Five¹⁾ の game をやっていた。Scully はその勝負をぶちこわし、Johnnie に客の荷物を運ばせ、三人の客を引き連れて洗面所へと案内した。Scully の客に対する態度は丁重で、恩恵の感情を表わし博愛の念にかられていたかのように

も思われる行為を示した。三人の客が洗面器で顔を洗うことから、**the Swede** の特異な行為が見受けられる。他の二人の客が顔が真赤になるほど洗ったのに対し、この **the Swede** は震えながら指を水につけただけでやめてしまったし、また部屋に戻った時もひどくおびえた様子で室内の一人一人をひそかに品評しているようであった。食事の時も、ただ **Scully** だけを相手に自分の話をしたが、反対に **Scully** の話には耳を貸さず、彼の視線は絶えず人から人へと移り、他の者に不思議な印象を与えている。そして最後に彼は“..... some of these western communities were very dangerous.”²⁾ と言い大声で笑った。彼の行動には常に罪を犯した者に見られる猜疑心と思われるひどい、おびえがあるのが特徴であった。また彼の恐怖による奇怪な行為と **Hotel** を囲む自然には荒れ狂う海のような雪景色、吹き荒れる風の激しさが、鋭いおびえ、空虚、そして孤立という共通点が伺えられる。

食事の後、**Johnnie** と老農夫の **High-Five** の勝負が口論で終わり、**Johnnie** と **the cowboy**、そして **the Swede** と **the Easterner** の新しい組み合わせが決まり、**High-Five** をすることになった。勝負が始まる前に **the Swede** は襲撃を予期するかのように、びくびくした様子で男たちの方へ歩みより奇妙な笑い声をあげた。この笑い声は他の者に実に奇妙な感情を抱かせた。しかし **High-Five** の勝負が始まり熱中していくにつれ、他の者は **the Swede** の態度のことは忘れてしまった。単純で感受性の鈍い **the cowboy** は叩き屋のくせがあり、いい札がくるたびに彼は机を叩き、またその都度 **the Swede** と **the Easterner** はみじめになっていった。**game** が進行するに連れ、**the Swede** の奇妙なふるまいを気にする者は誰一人いなくなった。その時、突然 **the Swede** が **Johnnie** に向かって“**I suppose there have been a good many men killed in this room.**”³⁾ と言い出した。先ほど **the Swede** が言った“some of these western communities were very dangerous”という言葉と同じ意味が、この発言にも含まれている。**Johnnie** はこの返答として、単に殺人事件は起こらないという事実を証言し、**the Swede** の言わんとする不正を意味する「殺人」、そして「危険」を理解していな

い。組んでいた **the Easterner** すら理解していない。同情ぐらいいはしてくれるという期待を裏切られた **the Swede** は、脅迫を受けたかのように体を震わせ、訴えるような視線を **the Easterner** に向けた。しかし彼はおびえながらも大げさな威張りの姿勢を忘れていない。彼が **the Easterner** に求めたものは自分の正しさの証明と、自分は孤独ではないという証明である。また彼の威張りの様子は自分の正に対する責任の主張である。**the Swede** は自らけんかを拒否しているが、自分が殺されようとしていると宣言している。彼がこの時宣言した「殺人」は自分の正しさの証明が失われた時の表現である。また正に対する自分の責任を責任のない回りの者に消滅されてしまうことから、信頼する者がいなくなり孤独になっていく立場を表現したものである。この状況に **Scully** は息子の **Johnnie** を叱り、立ち去るという **the Swede** をひきとめた。**Scully** は **the Swede** の意を理解しているわけではなく単なる宿泊人に対する社会的責任をもち、他の三人をせめることで **the Swede** を引き立てている。自分が宿屋の主人である以上、決して客に不愉快な思いをさせてはならないという義務が彼にはあった。**Scully** の、この不可解な状況の質問に対し他の三人は不思議そうに、わけがわからないという顔をし、全員、個人の責任を逃避している。二階で荷物をまとめだした **the Swede** は、自分の孤独を予想し、恐れ、回りの人間に対して大げさなふるまいをすることで、気を引こうとし寂しさを表現する。**Scully** は自分の義務と持ちまへの善人ぶりを発揮し、西部に対する恐怖心にとらわれたものと **the Swede** を解し、この地もやがて大都会になることを **the Swede** に説明し、立ち去ろうとする彼をなだめ、そして自分の部屋に連れて行った。そこで **Scully** は人間の情につけこみ、自分の娘や息子を自慢することによって **the Swede** の気をほぐそうとするが、**the Swede** は彼の話に耳を貸さず、おびえた囚人のようであった。**Scully** は寝台の下から、whisky-bottle を出し、**the Swede** に whisky を飲ませ、安心感をもたせようと努めた。**Scully** の行為は客に対する愛情をもった行為であるが、**the Swede** に立ち去られて、後に悪い評判をたてられてはならないという、自衛的な計算されたもてなしであり、真に **the**

Swede を思いやるものではない。the Swede は憎悪に燃えるまなざしを向けながらも、その whisky を飲み、酒の勢いで気を強くし孤独と不安を緩和させて他の三人の所へ Scully と大声で冗談をかわしながら戻った。Scully の the Swede に対するもてなしに、Johnnie は反抗した。Johnnie は自分の行為 と the Swede の不可解な行為に関連性を見い出さず、父が宿屋の人間で受け身であるという立場をも理解していない。the Swede は他の者よりも一段上であるという強気な態度をとっていた。Scully は息子の Johnnie にここが宿屋であることを強調し商売としての義務を告白する。Scully は社会的立場における商売人として、morality をもった責任感のある人間だが、それは彼の一面にすぎないものである。

夕食の席で the Swede は、彼を尻押しする Scully だけを味方とし、狂気と表現されるかのようにふるまった。回りの者は、みな彼のふるまいに圧倒されていた。彼は自分の信念の正しさを象徴するかのように、一人一人の顔を残忍な軽蔑に満ちた目でながめた。the Swede が fork でパンをとろうとした時、同じパンをとろうとした the Easterner の手にあやうく fork が突き刺さりそうになった。その fork が突き刺さろうとしたものは、先ほどの勝負で裏切られた the Swede の、the Easterner に対する反抗である。

夕食の後、男たちが別室に歩いていくとき the Swede は、Scully の昔、倒れたときの傷あとをもつ肩を情容赦なく叩いた。この一瞬 Scully はこの仕打ちに怒りを覚えたが、自分が宿屋の主人であるという立場の弱さと the Swede の調子にのった新しい態度は自分の責任であるとわきまえて、弱々しい笑みを浮かべただけであった。この Scully の態度は、他の者にも認められているが、しかし Johnnie は、この律義な父を批判している。Johnnie にとって宿は自分の感知するところではなく自分に不愉快なことがあれば自分の客であろうとも関係ないのである。Scully のような打算はないにしても、自分の立場を把握できない社会的に適応していない人間である。

Johnnie, however, addressed his parent in an aside. “Why don’t you license somebody to kick you downstairs?” Scully scowled darkly by way of reply.⁴⁾

Johnnie にとって Scully の責任による忍耐は父の性格の弱さであった。

夕食の後、the Swede は Scully の反対にもかかわらず再度 High-Five の勝負を提案した。先ほどからの自信で彼の口調は常に脅迫めいたものがあり強勢したものであった。the cowboy と the Easterner は提案に応じた。the Swede は Johnnie の方に視線を向け二人の視線が刃のように交差した後 Johnnie は、にっこり笑って提案に応じた。the Swede の脅迫めいた口調は彼の自己の正義の自信を象徴したものであり、それに対して Johnnie の微笑みは慰み半分である、ほんの遊びである勝負に対する自信とずるさを象徴している。High-Five の勝負は始まり the Swede は再び the Easterner と運命を共にすることになった。前の勝負で the cowboy のくせであった叩き屋が今回の勝負では the Swede のものになっていた。突然、the Swede が Johnnie に向かって言った。“You are cheatin!”⁵⁾ この言葉で小さな部屋は醜悪なものとなり他の者は形相を変えてしまった。先ほどの勝負において the Swede の言った「殺人」は今回の勝負で彼が宣言した「インチキ」に結びつく。前回、けんかを否定した the Swede が今回、巨大なこぶしを Johnnie の顔面にふりかざし Johnnie はそのこぶしの向こうで自分を非難する the Swede の燃えるようなまなざしを見つめた。自ら「インチキ」と宣言し、にぎりこぶしをかざした the Swede の行為は、Johnnie の不正に対して勘忍袋の緒が切れた結果のみの行為ではなく自分の正義を押し通す彼の主張と自ら孤立してしまうことを乗り越えた勇気であり、また正に対する責任の表明を表わしている。ぼう然と立ちつくす他の三人と当事者二名の沈黙が破れ、激しい口論がかわされ他の者の仲裁もむなしく Scully の許可で、全員立ち合いのもとで決斗をすることが決まった。仲裁のとき、the Easterner は懇願するように小さな声で次のように言っている。

“Oh, wait a moment, can't you? What's the good of a fight over a game of cards? Wait a moment!”⁶⁾

the Easterner にとっても Johnnie と同じく、High-Five は、ただの遊びであり大きな意味はなく、この争いによる悲劇の到来を恐れている。

男たちは戸外へ出た。Johnnie と the Swede 以外の者は興奮し動揺していた。Johnnie は決して孤独ではない。彼の肉親である父親 Scully は決斗を決定した以上、宿屋の主人から肉親の父親の立場に戻るからである。五人の男たちが決斗場へと歩く風景は荒れ狂い、気違いのような風と渦巻く雪片が全員の心理を異常なものとした。また、この描写が大悲劇の結末を予想させる。歩きながら the Swede は孤独を恐れ、また自らそれを予想し自分以外の者全員の襲撃を予想し非難した。Scully は公平な立場で息子を負かしさえすればよいことを the Swede に言いかけ決斗が始まった。the Easterner はこの決斗を実に冷静に見ている。彼は決斗の始まる前の空気の重々しさに苦しみ、決斗の終結だけを待ち望んだ。the cowboy の “Go it, Johnnie! go it! kill him! kill him!” という Johnnie に対する無責任な声援とは正反対に、彼は何も言わず勝敗など関係なく心を空虚にしている。最終的にこの決斗は the Swede の勝利に終わるが、the Swede の栄光の裏には克明な孤独な姿が潜んでいる。Scully は父親として息子 Johnnie の敗北を嘆き、倒れた息子をみじめに思うが、the Swede には勝利者として彼を認め、公平な立場を忘れてはいない。感受性の乏しい the cowboy は the Swede の悪口を言うだけである。決斗に負けた Johnnie は自分をくやしき思い、“Did I hurt—hurt him any?”⁸⁾ と Scully にたずねるのである。彼の言う “hurt” というのは世の中のずるさであり、正義だけでは生きられない人間のむなしさである。単なる遊びにすぎないと思っていた Johnnie にとって、the Swede の恐ろしい程の潔癖さは重荷だったのである。彼は、the Swede の正に対する追求力に圧倒されて負けたのである。彼の敗北に、がてんがいけない the cowboy は自分が相手になりた

いと望むが、そのけんかはあくまでも Johnnie のけんかであり、Johnnie の敗北を他人がつぐなうわけにはいかないという、Scully の説得で the cowboy は怒りをおさえた。Scully は常に親の弱味をひた隠し、the Swede の支払いも拒否する。以前のように Scully は客の前では宿の主人として威厳をくずさないのである。the Swede が嘲笑の一べつを投げ捨てて外へ出て行った後、Scully は父親としてのくやしさを表わし、決斗を許可した自分の責任を嘆き、the Swede の悪口をぶちまける。しかし彼には最後まで the Swede の正義を認める能力がないのである。

勝負に勝った the Swede はすさまじい嵐の中を栄光をかみしめ、荒れ狂う環境をも彼の得た自信と強気で押しのけて歩いていった。彼は一軒の酒場に入り、whisky を一息にグイグイと飲み自慢気に自分の勝利を話した。彼は酒の勢いで、自信から、うぬぼれへと化し、となりの table で飲んでいて四人のうち一人である the gambler に、無理やりに酒を飲ませようとした。“Take your hand off my shoulder and go way and mind your own business”⁹⁾ と言った男だけの世界で認められている信頼の厚い the gambler の忠告をよそに、the Swede は酒の勢いとうぬぼれで the gambler にくってかかり、のどもとをつかみ “What! You wont drink with me, you little dude?”¹⁰⁾ とどなり散らし、結局 the gambler の刃物に刺されて殺されてしまった。the Swede は慰み半分の High-Five の game のいかさまの指摘で勝利を得、そして皮肉にも professional のいかさま師である the gambler に殺されてしまうのである。最後まで彼は孤独であった。

The corpse of the Swede, alone in the saloon, had its eyes fixed upon a dreadful legend that dwelt atop of the cash-machine: “This registers the amount of your purchase”¹¹⁾

Hotel で支払わなかった金額の意味の総決算がここで支払われることになったのである。

the Swede の死後、数カ月が過ぎ、the Easterner は the Dakota line の境に近い小さな農場で働く the cowboy をたずね、the gambler の三年という軽い刑を告げる。the cowboy は the Swede の死を自業自得と言ひ、単なる運命の成り行きと思っている。それに対し、the Easterner は the cowboy を馬鹿にし、Johnnie のインチキの真実を教える。

“Johnnie was cheating. I saw him. I know it. I saw him. And I refused to stand up and be a man. I let the Swede fight it out alone. And you—you were simply puffing around the place and wanting to fight. And then old Scully himself! We are all in it! This poor gambler isn’t even a noun. He is kind of an adverb. Every sin is the result of a collaboration. We, five of us, have collaborated in the murder of this Swede. Usually there are from a dozen to forty women really involved in every murder, but in this case it seems to be only five men—you, I, Johnnie, old Scully; and that fool of an unfortunate gambler came merely as a culmination, the apex of a human movement, and gets all the punishment.”¹²⁾

II

この “*The Blue Hotel*” は section IX から成り、作者 Stephen Crane (1871~1900) の主張及びこの作品の theme は最後の section IX に集結されている。この section で the Easterner の言った “..... Every sin is the result of a collaboration” という連体性に theme をおいた場合、the Swede の「不安」と「恐怖」はどのように検討されるであろうか。the Swede のおびえからくる奇怪な行動は他の者に「西部に対する恐れ」と解されているが、この作品を総体的に見てみると、そのようには解されない。the Swede の恐怖は道徳的な正義に対する責任を回避する人間たちから孤立してしまうおびえである。the East-

erner の言う「連体性」は、個人個人の責任を集結したものであり、その責任を貫く人間が一人である場合、ずるさをまとった人間の間では責任を貫くがゆえに、「孤立」という立場にその人間をおいてしまうのである。「連体性」の要素である「責任」は、決斗にふみきった the Swede の勇気に描写され、また the Swede の死は、責任を回避し勇気のもてない回りの人間の道徳的な罪の結果を表わしている。the Swede の「恐怖」「おびえ」を中心として書かれた section VIII までの文は、「責任」とかかわりあう人間の道徳観念の欠如がもたらす「孤立」を表わし、そして section IX において、「孤立」を乗り越えた「勇気」という道徳的観念を含め、theme「連体性」と結論づけている。

次に同章において the Easterner の言った the gambler の描写に焦点をあてて考えてみたい。the Easterner は the gambler を、一つの意味を有する名詞あるいは動詞ではなく、単なる修飾語としてとえている。これは、the gambler の自己の運命を支配する力の欠如を表わしているものである。その点で考えていくと the Swede には、運命を支配する力は the gambler 以上に欠如し、彼の死は、the Swede 自身が招いた結果となる。the gambler に the Swede の Hotel においての事件での運命を支配することは不可能であることは明白であり、もし the Swede が相手を、the gambler 以外の三人の男の誰かを選んでいたら、the Swede も殺害されずにすみ、また the gambler も「殺人」という罪を負わなくてすんだのである。このように theme を自然主義的決定論と仮定した場合、the Swede の死に対する責任は誰にもなく、連体性を通して考えた場合と対照的なものになる。しかし自然主義的決定論でこの作品を見た場合、section VIII までの内容は単なる事件の成り行きにすぎず、section IX の必要性がない。

以上のようにこの作品の theme として、「連体性」と自然主義的決定論の二つを取り上げることが可能であるが、section VIII までの内容と section IX の内容は、おのおの孤立したものではなく、section VIII までの結果が section IX に集結された一貫したものなのである。the Swede の死はあくまでも事件の結果であり、その死の原因及び、

この作品の theme が section IX の the Easterner の言葉に描写されているのである。

the Easterner の性格から考えてみた場合、彼は非常に meek な人間で Johnnie の不正を見ても黙っていた。しかし一番冷静な人間で、the Swede と Johnnie のけんかをやめさせようとしたのも彼であり、そして彼は勇気をもてずに the Swede だけに、決斗をさせたことを反省し、そして最後に “We are all in it” と言っている。この the Easterner の言葉である “We are all in it” という教訓的な発言は作者 Crane の意志であり主張であると考えられ、ゆえに section IX は必要となり theme は「人間の連体性」と考えられる。そしてこの作品最後の the cowboy の言った “Well, I didn’t do anythin, did I?”¹³⁾ という疑問の答えは互いの責任であるという、the Easterner の言葉であり、そこで連体性の欠如による「孤立」が明白となる。

社会において一人以上の人間と接触をもった場合、「責任」ということは回避できない問題である。一人一人の責任は連体性を生み、そして、その責任が消失した場合、孤立した人間を生み出し、連体性は破壊されてしまうのである。この道徳的意義がこの作品の、theme であり、また作者 Crane 自身が一生悩み、そして求め続けてきたものの一つであろう。

Notes

- 1) アメリカの賭博師たちが行っていた、All Fours から派生したトランプゲームの一種であり、カードのそれぞれにポイントがあり自分の得たカードのポイントの合計が14ポイントになると勝つゲームである。Ace, deuce, Jack, 10のカードが、それぞれ1ポイントであり5のカード (Right Pedro とよばれている) と同じ絵の5のカード (Left Pedro) は5ポイントとなっている。最初に出された札と同じ組の札を出していくゲームなので5のカードが重大なカードとなる。
- 2) THE WORK OF STEPHEN CRANE “THE BLUE HOTEL” p.96.
- 3) *Ibid.*, p.98.
- 4) *Ibid.*, p.110.
- 5) *Ibid.*, p.112.
- 6) *Ibid.*, p.114.

- 7) *Ibid.*, p.117.
- 8) *Ibid.*, p.120.
- 9) *Ibid.*, p.129.
- 10) *Ibid.*, p.129.
- 11) *Ibid.*, p.130.
- 12) *Ibid.*, pp. 131-132.
- 13) *Ibid.*, p.132.